

読書感想文部門

文部大臣奨励賞

「私達の使命——フリードリヒの死を通じて——」
あのころはフリードリヒがいた“を読んで”

大阪府大阪教育大学教育学部附属
天王寺中学校

二年 江原 由貴



「こんなことがあっていいものなのか」

「いやこれが現実だ」と本を読んでいくうちに、私の心の中でこんな言葉が繰り返された。どのページも悲惨な空気が流れ続け、目をそむけたくなるような情景だ。幸せにとっぴりとつかっている私達の生活からは想像もできないような事件が、次々とフリードリヒの身の上にあふりかかる。「かわいそう」とか「ひどい」とかいう以上に私は戦争をつくり出した「人間」に対してくやしさと怒りがこみ上げてきた。「人間っていったい何だろう？」始めに浮かんた疑問だ。科学を生み出し、子孫をつくり、自然環境を守り、助け合っていくのが人間なのに戦争になると、同じ人間のすることは思えないほど残酷になって、にくみあい、殺し合う。一人でできないことも大勢だと残酷なことでも平気でできる神経をもつ、人間の心の底には、こういう悪魔がやっぱりひそんでいるのだろうか。

差別って何だろう？ ナチスが台頭してきてユダヤ人

日本子どもの本学会 会長賞

「幸せ——『少年H』を読んで——」

大阪府大阪教育大学教育学部附属天王寺中学校

三年 前川 駿

この本を読んで僕が日から学んだこと、それは生きる目的って何ということ。この話の中で日は生きるということ。自分の心の葛藤（かっもつ）があります。戦争時代、日本は勝つために新聞の内容等あらゆる所で取り締まり日本に有利なように書かせていました。元々矛盾があれば解決しないと納得しない日はこの矛盾とかなり戦っていました。そんな情緒不安定なときに日にとっては嬉しいことが起こりました。戦争は終わったのです。しかしこれが日の心を狂わす原因となったのも事実でした。常識、それは一体何なのでしょう。それは人の心だけでなく、その人の人格まで変えてしまう恐ろしいものです。しかもそれは時代によっても場所によっても変わります。戦争が終わればすべてが180度変わったのです。今までの常識は非常識になったのです。日は自殺しようとしています。何かを信じる、誰かを信じる、そんな物を失った日にとって生きるというものは苦痛であったのかも知れません。しかし日は死ねなかったのです。何かを信じて生きるのではなく、自分を信じて生きるということに気づいたのです。

僕が最近よく思うことがあります。今までは自分にとって今の生きがいとは何かというのをはつきりさせて、それを追い求めるという生き方をしていました。しかし今はただ一生懸命生きて、そんな中にオマケみたいな幸せがあればいいなあって想います。

「少年H」の生き方を見つめたうえで、「生きる」ということ、「幸せ」ということにテーマをしぼり、考えを深めています。前川君の想いが読み手に伝わってくる素晴らしい作品です。

の迫害が始まり、幸せだったフリードリヒの一家にも徐々に暗雲がのしかかる。ユダヤ人というだけで、フリードリヒはユダヤ人の身分証明書を持たされ、ユダヤ人学校へ転校させられる。何かにつけどろぼう扱いされたり、因縁をつけられたりし、唯一の娯楽であるプールや映画館に入ることすら禁じられる。その上公園のベンチもユダヤ人は黄色のベンチにすわられる。

フリードリヒの家族は一つ悪いことをしていないのに、彼らは人間としての扱いをうけられず、生きているという存在すら否定されてしまっている。こんなばかげた、おろかなことは早く皆が気づき、なくしていくべきだと思ふ。

最終の地下室の場面は、この物語で一番悲惨な場面だ。父や母とも死に別れフリードリヒは爆撃の恐怖の中、ユダヤ人というだけで防空壕に入ることを拒否される。射撃と爆撃で一刻の休みもない轟音（ごうおん）の連続の中でフリードリヒは孤独と恐怖の中、十七才の生涯をとおる。

一緒に防空壕に入った人たちは告発をそれぞれこの少年を助けることすら出来なかった。ナチスという権力の前には誰一人抵抗できない、正義の力は何の役にも立たないことを私はどこかしく、又、腹立たしさで一杯になった。「誰か助けてあげて。お願い。」と心の中で私は叫ぶずにはいられなかった。

何という残酷さだろう。フリードリヒは何を考え、誰をうらんで死んでいったのだろう。家族とくらしした幸せだった時のことを思い出し、平和をのぞんで死んでいったにちがいない。助けを求めたにちがいない。どんな目でナチスや大人をみていたのだろう。しかし、フリードリヒの周りも悪い人ばかりではなかった。死ぬ前に自分にやさしくしてくれた裁判官や先生、ヘルガのことを一瞬でも思い出しただろう。この三人は悲しい運命をたどるフリードリヒを勇気づけ生きている希望を与えた唯一の明

優秀賞

「先生の忘れられないピアノ」

東京都江東区立小名木川小学校

五年 杉野 知子

「この本が大好き」という気持ちから、「上野歌子先生が、戦争中命がけで守ったピアノを見てみたい」という気持ちへの高まりが、よく伝わってきます。

夏休みに佐賀県の鳥栖（とり）へピアノを見に行ったことで、感動がいっそう深まり、実感のこもった内容になったと思います。

「家族の大切さを知って」

愛知県岡崎市立上地小学校

六年 矢野 美奈子

重い自閉症の兄をもつ、未来と悠、そして両親の五人家族の強いきずなを動かされたことが、自分自身の問題にひきよせてしつかり書かれています。人の不幸とか幸福とかを、勝手に決めつけるのではなく、他人に対する思いやりを大切にしたいという、矢野さんの思いがあふれてくるような作品です。

「金色の髪をした星の王子さまへ あなたの友人より」

大阪府大阪市立北稜中学校

三年 戎野 彩子

「こどもだったことを、忘れないで、心で感じる真正正銘の大人になりたい」という、戎野さんの願いが読み手に響いてきます。星の王子さまが気づかせてくれた「心でもものを見ることができるとこもの心」をこれからも大切にしていってほしいものです。自分の言葉で素直にのびやかに書かれた作品です。

る光だった。読者の私にとっても救いとなった場面である。ユダヤ人と一緒にいることすらみつければ大変な事なのに、フリードリヒと一緒に黄色いベンチに腰かけ楽しく話したヘルガ。「ユダヤ人は我々と全く同じ人間なんだ」と生徒の前で言ったノイドルフ先生。「心配しなくてもいいんだよ。正しいことが通るようにそのため

に私がこの席にいるんだからね。」と言った裁判官。私もどんな状況になっても友達を助けられる正義感をもっていたい。そして、正しいことは正しいと胸をはって言える人たちがそが勇気のある大人、こんな尊敬できる大人になりたいと思った。この作品を通じて頭のすみにぼんやりとあつた戦争への意識がフリードリヒの心をえぐるような深い苦しみによって目をさまされたような気がした。戦争は何の罪もない人々を苦しめ、想像も出来ない惨状をもたらすもので、人間のすばらしさや叡智をしりぞけ、文化や幸福な生活、命をもうばうおそろしいことだ。こんなばかげたことを人間は何度も歴史の上で繰り返してきた。これらのことを私達は目をそむけず、わかつているんだと安易にうのみにせず、事実をしつかり自分たちから求めて知ることが大切だと思った。未来の時代に、第二のヒトラーが出ないとも限らない。

フリードリヒのように犠牲になった人々の尊い命を無駄にしてはならないためにも、戦争の悲惨さを次の世代へと伝えていくことが私達の使命だと思う。そうしなければ、フリードリヒの死が余りにも無益すぎる。

優良賞

「さっちゃんのまほうのて」をよんで

（高松市立太田小二年）高須 杏奈

「とべないホタル」とぼくのすず虫

（港区立立白小三年）近藤 正篤

「風の翼の子どもたち」

（安城市立安城南中一年）堀 麻里子

「親川智子との出会い」

（久瀬村立久瀬中一年）高橋麻衣子

「王様からの夢の種」

（愛知教育大学附属岡崎中二年）高村 有香

佳作

「つきよの森のおくりもの」を読んで

（八郷町立岡部小二年）山田 彩織

「わたしのいもうと」を読んで

（戸倉町立更級小二年）小松 由佳

「天使のいる教室」を読んで

（星美学園小三年）横瀬 彩

「真つ黒なおべんとう」を読んで

（星美学園小四年）田村 彌佳

「ルドルフとまぢのとりだち」を読んで

（高松市立太田小四年）西山 龍馬

「神戸つ子はまけなかった」を読んで

（川崎市立向小五年）中嶋 泰斗

「親友とは何か——走れメロスを読んで——」

（岡崎市立連尺小六年）本多 浩代

「民族を越えて——『あのころはフリードリヒがいた』を読んで」

（千葉大学教育学部附属中一年）角野 愛

（大阪教育大学教育学部附属天王寺中二年）植野 吾郎

（つくば市立手代木中三年）岡野由紀子

総評

読まずにはいられないという本との出会いが、読書感想文の第一歩です。多くの本のなかから、いちばん心に残った本を選んで、テーマをしぼって書いたもののなかに、きらりと光る作品がたくさんありました。また、中学生の作品に力作が多かったように思います。今後、「その本を読んでみたい！」と、読んだ人が思うようすばらしい読書感想文を期待します。